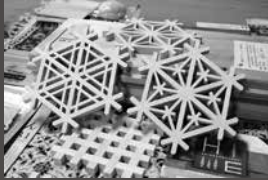


# 木を切り、木を使い、木を育てる — 持続可能な林業をめざして



組子などの「木づかい」小物

林野庁 森林整備部長  
本郷 浩二 氏



戦後、大量に植林された樹木が成長し、資源として見直されている今、「育てる時代から使う時代へ」という発想で日本の林業を新たに構築しなおそうという動きがある。持続可能な産業としての林業をどう育てていくのか、生産と消費の現場を広く見ながら、日本の林業政策を方向づけてきた林野庁森林整備部長の本郷浩二さんに話を聞いた。

## 「木づかい」が 求められる日本の森

— まずは、世界有数の森林国である日本の森の特徴をうかがえますか？

本郷 亜高山帯から亜熱帯までの森林植生の多様性と、氷河に覆われなかったための種の多様性は、世界にも誇れる点ですね。

最も特徴的なのは、人口が多かったため、北海道を除いて基本的に平地は居住地や農地となり、森林は山地にしか残っていないことです。逆に、そのおかげで国土の3分の2がまだ森林に覆われているわけです。森林が人間の生活圏とはっきり区分

けされた環境は、もののけ姫の世界観といえますか、日本人が森や山に抱く宗教観に繋がっていますね。地形によるところが大きいのです。日本文化として代表される京、大坂、江戸などの都市文化は、花鳥風月は愛でたかもしれませんが、ドイツなどの外国のように森に親しむ文化ではなかったでしょう。

— その日本の森は、今、どのような状況にあるのでしょうか。

本郷 今、ドラスティックに変わっているのが人工林の状況です。戦後、昭和20年代後半から30年代にかけて大量に植林された樹木が、ようやく木材として使える時期になってきたんですね。昔から自分の山で生業として林業を続けてきた人は別ですが、植林しただけで樹木を使うことなく今に至った森林所有者は、これまで50〜60年間、木材収入はなかったのです。それが初めて収入になる時期に入ったというのが、一番の変化でしょう。

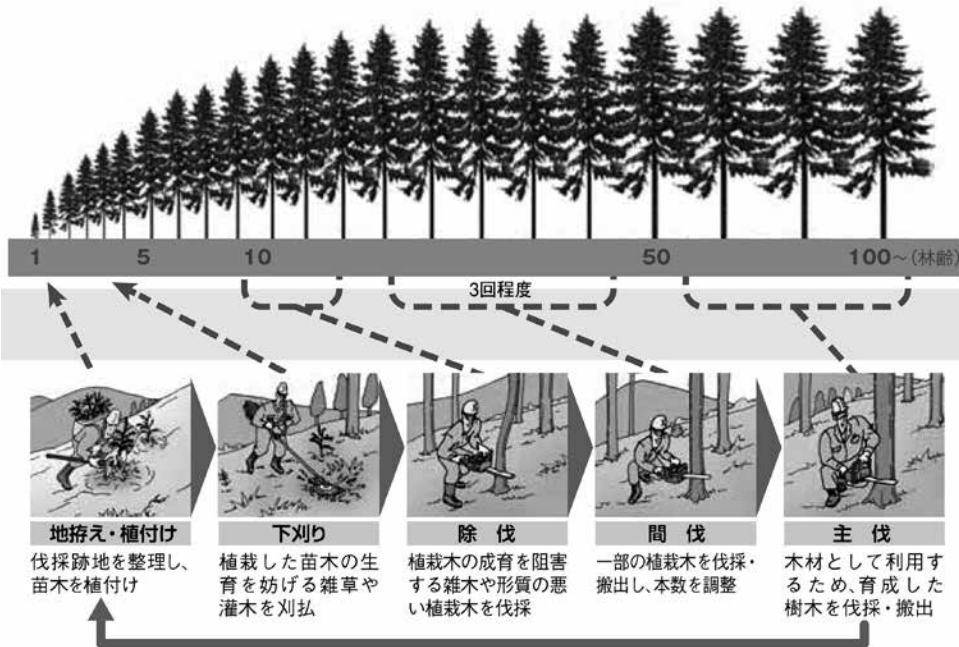
— 『平成26年度版森林・林業白書』

を見ると「木を育てる時代から使う時代へ」という言葉が出てきます。私たちは長年「森を守るもの」と考えてきて「木材を利用する」という発想がなかった気がします。

本郷 現在、もっとも重要な施策は人工林の「間伐」です。成長に応じた一部の植栽木を伐採し、立木密度を調整するのですが、これをしないと林に太陽光が十分に入らず、表土が流出してしまうし、風雪害にも脆弱なんです。20年ほど前までは、間伐すると自然破壊だと誤解されましたが、今ではほとんどの方に間伐の必要性を理解いただけるようになっていきます。

ただ「主伐」については、「木は切つてはいけない」と思う方が、まだとても多い。林業にこれから必要なのは、木を切つて利用し、もう一度、苗木を植えることです。樹齢50年でも100年でも、どこかの時点で主伐して、森の木々を循環させることが林業の持続性に繋がります。そのためには木材の需要を大きくする、使ってもらい「木づかい」の施策が重要です。

森林整備のサイクルの例（育成単層林の場合）



資料：林野庁（2013）森林整備事業のあらまし（平成 25 年度版）、一般社団法人全国改良普及協会：9.

—今、日本の樹木はどのように利用されているのでしょうか。  
本郷 樹木は育つまでにとにかく

時間がかかります。その間に、かつては木材を使っていた現場が、アルミやスチールなど他の素材に取って代わられていきました。

たとえば昔、建築現場で使う足場は樹齢20年ほどの細い丸太でした。もう少し太いのは電信柱に使いました。現在、そうした用途がなくなっただけで、主伐で利用するような建築材としての需要しかない、というところまで来ています。

—建築材として日本の樹木は高価なイメージがありますが、実際はどうなのでしょうか。

本郷 世界の人口は増えていて、燃料として使われる木材の需要は爆発的に増えています。しかし建築用材などは決して増えていない。ドバイのような中近東での需要はあるものの、木材が逼迫するような状況ではないですし、価格が上がるようなら、コンクリートなど他の素材を使うようになるでしょう。これまで、国内の木材価格は右肩下がりで推移して、国際価格と比較して安定したところがありますが、このようなことから、今後上がる見込みはほとんどありません。一方で、林業経営に必要な人件費は上がっているの

で、経営的な観点で見れば、木材の値段は昔に比べて非常に安くなっているといえるのです。

**林業に就労する若者たちが増えている**

—価格が上がらなければ、コストダウンで生産性を上げる方法がありますね。

本郷 そうですね。山から木材を搬出するコスト、製材や流通のコストをダウンする必要があります。それも林業政策のひとつの柱です。今、日本では一人あたり一日平均3立方メートルしか生産できませんが、北欧やドイツでは何十立方メートルです。丸太の生産性からすると10倍くらい違う。この違いは、欧州などと比べると、日本の山は斜面が急で林道の数が少ないことが大きな要因なのです。

所有権で細分化した森林を一括して、事業を集約化することも必要です。また、一年中植林ができるコンテナ苗や高性能の林業機械などを使って、林業の作業の効率化を図るうとしています。それ以外でも、輸

入材との競争を克服できるよう、品質アップとコストダウンの工夫をお願いしていきたいと思います。

―林業の現状が厳しい一方、都会の青年が林業に目覚める映画「ウツジヨブ!」や「林業女子会」が各地にできるなど、最近では林業に注目が集まっている気もしますが。

**本郷** 今、ようやく利用できる樹木が増え、木を伐採し、お金に変えることができる状況になってきたのですね。そこには、補助金で植林して間伐するのでは得られない達成感があって、だからこそ産業として注目され始めたのだと思います。

2003年度から林野庁が始めた「緑の雇用」事業で、若手の新規就業者を確保し育成した結果、この10年間で新規就業者が約3万4000人も増えています。ストレスの多い都会の仕事ではなく、自然のなかで働きたいという欲求もあったと思いますが、東京で年収一千万円稼いでいたシステムエンジニアの人が林業に転職したという例もあるんですよ。

―お金には代えられない魅力があるということでしょうか。確かに、目の利益ばかり気にするのではなく、長い時間をかけて仕事を成し遂げる林業ならではの魅力はありますね。

**本郷** 幸い35歳未満の若年者率もアップして、労働力の高齢化に歯止めがかかっている状況です。ただ悩みもあって、平均年収が300万円に届かないのです。これで親子4人が暮らすのは難しい。なんとか労働生産性アップと丸太を高く売る工夫をこらして、年収500万円くらいを目指したいです。

## オフィスの木質化がCSRになる

―消費者が木材をたくさん利用して、林業の活性化をお手伝いすることもできそうですね。

**本郷** 世論調査をすると、家を新築したい人の8割から9割が木造を希望しているものの、80万から90万戸といわれている新築住宅で木造は4割ほど。この理想と現実の

ギャップを少しでも小さくしたいですね。実際に山で伐採現場を見て「この木がうちの黒柱になる」という見学ツアーを行っている工務店さんもありますし、耐火集成材で中高層建築物を建てるという技術開発も進んでいます。希望する人が木造の家を建てられるよう丁寧に情報提供を行い、流通を改善すれば、町場の消費者と地域の木材の繋がりを太くできると思います。

―今後は新築だけでなく、リフォーム需要も大きくなりそうですね。

**本郷** 地域産材の入手方法などを工務店さんに知ってもらい、お客様に「地域産材はどうですか?」と提案してもらおう。木材流通ネットワークをつくる支援をしていきたいですね。今まで国産材を使ってこなかった方に使ってもらおうのが、新たな需要の掘り起こしなので。

―今、多くの企業がCSRとして植林などに取り組んでいます。今後は「国産材使用」という形でも社会貢献ができそうですね。

**本郷** どんなものでも、コンクリートや鉄、アルミなどを使っている部分を、もう一度木に戻してくれたら、と思うのです。たとえば家具メーカーさんにスギやヒノキ材を使っていたら、特に一番お願いしたいのが、オフィスの木質化です。家の構造材に使うだけでなく、内装や家具でも木材の利用が広がればと。壁の腰板、家具、床などに木を使う取り組みを行っていたらいいか、というのが切なる願いです。

―林野庁の庁内は、壁や家具、案内サインに木材がたくさん使われていて、とても温かみがありますね。

**本郷** 木の香り成分には心身をリラックスさせる効果や抗菌作用があります。校舎に木を使うと、子どもたちの集中力が高まり、インフルエンザで休む子どもも減ります。これは統計的な数値がでていて効果が見えかねません。校舎を社屋に置き換えてみれば、仕事の作業効率がアップし、病気で休む社員が減るといった利点があるわけです。

休憩室やロビー、食堂などリラッ

クス効果が求められる場所に木材を使っていただとリフレッシュできて、労働生産性も上がるでしょう。

—防火上の問題は大丈夫ですか？

**本郷** 内装で使う分には、建築基準法を守れば大丈夫です。学校、オフィスだけでなく、店舗内装を木造でというお願いをしていて、すでに高知、宮崎、秋田などではコンビニエンスストアの内装に使っていただいています。東京ではスーパ専門のチェーン店「Soup Stock Tokyo」が、多数の店舗で国産材を内装に使用しておられます。

### 木を使うことで地域社会を活性化する

—今後の林業活性化のため、個人に期待することはありますか？

**本郷** 山を所有している方には、自分の山をしっかり与管理していただきたいんです。農業なら耕作放棄地といいます、林業だと放置林という言葉があつて、何十年も人の手が

入っていない森林があります。遠くから見ると緑色で気がつかないのですが、実情は「もやし林」です。樹木は細くて、真つ暗で不健康な山になっている。間伐が必要ですから、ぜひ手入れをしてほしいです。

—自然が身近でない都会住まいの人ほど、木を使うということが大切に思えますね。

**本郷** 今年、九州大学である実験をしました。木で内装を施した部屋と、木目をプリントしたビニールクロスを貼った部屋を用意して、それぞれ学生たちに生活してもらい、さまざまな作業を行いました。その結果、明らかに木の内装の部屋の方が疲労回復度などもよかったです。学生の主観ではビニールクロス貼りの方が評価が高い。「木のにおいが臭くてイヤだ」というのです。木の家に住んだことのない若者が多く、無臭空間で生活しているので、違和感があるのでしょうか。

—親世代が、すでにコンクリート住宅での生活しか知らない場合も多い

でしょうね。

**本郷** 幼稚園入園前くらいの子どもたちを、ヒノキやスギのおがくずのなかで遊ばせると、いい香りがするといつて喜ぶんです。そういう経験をしなくて育つと、「木が臭い」という感覚になってしまう。ですから親御さんともども、できるだけ木と触れあう機会を増やして、木の良いところを伝えていってほしいです。

—建築材に限らず、さまざまな形で木を生活のなかに取り入れるのもいいですね。木の家具、木の小物類…暮らしの潤いになります。

**本郷** そうですね。建築材にこだわらず、工芸などさまざまな用途も考えられます。飛騨高山の組子の例などもあります。伝統的な工芸と連携、協働して需要を拡大することも大切です。地域でそうした技術を持っている人たちが若者に伝承することができれば、地域活性にもなります。価格がどんどんあがる石油でつくるプラスチックだけではなく、少しずつでも地域の木材を使え

ば日本国内でお金が循環し、経済も活性化します。すると人々の生活が維持され、地域が豊かになっていく。そんなよい循環を実現できればと思います。

—「木づかい」で暮らしも地域も豊かにというのは、素敵な発想ですね。ありがとうございました。

インタビュー 若林朋子  
2014年8月29日林野庁にて

## PROFILE 本郷浩二 (ほんごう・こうじ)

林野庁森林整備部長。1960年石川県生まれ。京都大学農学部林学科を卒業し、1982年林野庁に入庁。青森営林局及び管内営林署で、造林や森林経営業務に従事した後、造林技術協力のためマレーシア・サバ州に3年間派遣。帰国後、熊本営林局小林営林署長、福井県林政課長など国有林野事業や民有林行政における現場業務の指揮を担当。その後、林野庁の民有林部局、国有林部局のさまざまな業務を担当し、2013年7月から現職。

E-mail : koji\_hongo@nm.maff.go.jp